平成２７年度　第２回　鳥取市総合企画委員会議事概要

１　日　　時　平成２７年８月１０日（月）１４：００～１６：００

２　場　　所　鳥取市役所　本庁舎６階　全員協議会室

３　出席委員　上山弘子委員、尾崎直美委員、小野澤弘成委員、小谷文夫委員、下山裕子委員、白岡あゆみ委員、谷上雄亮委員、茶谷友士委員、冨岡庄一委員、塚田比佳里委員、西村賀代委員、橋本勝信委員、松本壽惠委員、松本弥生委員、山根滋子委員

４　欠席委員　岡田一壽委員、岡本洋一委員、谷口節次委員、棚田厚委員、森英俊委員、森原昌人委員

５　鳥 取 市　市長、副市長ほか関係部（局）長（監）、政策企画課創生戦略室（事務局）

６　開　　会（太田政策企画課長）

ただいまから平成２７年度第２回鳥取市総合企画委員会を開会します。

鳥取市総合企画委員会条例第６条第２項において、委員会は委員の半数以上の出席がなければ会議を開くことができないと規定されています。本日は、全２２名中１６名の委員に御出席いただいており、今回の会議が成立していることを報告します。

なお、本日は、岡田委員、岡本委員、棚田委員、谷口委員、森委員、森原委員、以上６名は、所用につき御欠席です。

開会に当たり、深澤市長より御挨拶申し上げます。

７　市長あいさつ（深澤市長）

皆さん、こんにちは。毎日暑い日が続いていますが、大変お忙しい中、本年度第２回目となる鳥取市総合企画委員会に御出席をいただき、誠にありがとうございます。

御承知のように、現在、全国の自治体が地方創生ということで、それぞれの総合戦略や人口ビジョンの策定を進めています。本市においては、本年５月の第１回の本委員会におきまして、鳥取市版の総合戦略と人口ビジョンの骨子案をお示しし、委員の皆様からさまざまな御意見等をいただいたところです。本日は、こういった御意見等も踏まえて、具体的な内容、肉づけした素案についてこれから御説明し、御議論をいただきたいと思っているところです。

この地方創生の取組、いろんな捉え方があると思っていますが、今、地方がそれぞれのいろんな特性や持ち味、地域資源を生かして人口減少や少子高齢化、また東京一極集中、こういったことに歯どめをかけていくと、そのことによって地域社会の形をつくっていくということで、また、それが現在の我が国のアンバランスな状況を解消していく、この国の形をつくっていく、このようなことであろうかなと思っているところです。

御承知のように、一昨日からジャマイカの陸上競技選手団の皆様が続々と鳥取市に来ていただいており、これに先立ち、私は、４月にはリカルド・アリコック駐日大使をお迎えしていろんなお話をする機会がありました。共通しておっしゃっておられましたのが、ホスピタリティー、鳥取の親切なおもてなしの心、そういったものが大変すばらしいということをおっしゃっておられました。もちろん美しい豊かな自然、そしてファシリティーズということですから、陸上競技関係の施設が大変すぐれていると、こういったこともあろうかなと思ったわけですが、今まさにこういった鳥取市の持っておる資源、特性を生かして地方創生をこの鳥取の地から発信しているといったことであると思っています。鳥取市の持っているポテンシャル、また、伸び代、こういったものはまだまだ他の自治体に比較しますと大きなものがあると思っているところです。こういった鳥取市のよさはたくさんあります。そういったことも踏まえまして、どうか忌憚のない御意見を賜りますようお願い申し上げまして、御挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

８　委員長あいさつ（安田委員長）

今年の４月に、経産省から生活システムの見える化というソフトウエアが発表されました。いち早く６月１４日に私の手元に届き、日本銀行の前松江支店長の木村武様から書類をいただきました。表題は、そのシステムを使われた私案でありますけれども、山陰の暮らし、東京の暮らし、どっちが暮らしやすいかということでありました。

かいつまんで話ますと、３０代の夫婦で子供２人、７０平米のアパートというか、マンションにお住まいの方、夫婦共働きであります。その場合に年収がお二方で１，１１０万円という年収であるようです。これは去年の暮れの試算になっています。松江でどうかということで同じ値を使われて試算しますと、８１０万円、実に３００万円も所得が違うのです。これだけで考えますと、絶対に東京のほうに住みたいなと思われるわけですけれども、最低生活必需品、いわゆる人間が最低で生活する上においての必要なもの、衣食住、これが東京では９９０万円要るようで、１，１１０万円マイナス９９０万円イコール１２

０万円の豊かさというのでしょうか、余剰金、これは貯金と言ってもいいかもわからない。それを今度、山陰のほうに当てはめていくと、生活必要品は７３０万円要るということであり、８１０万マイナス７３０イコール８０万、ここで差は実を言うと４０万円しかないわけです。それを今度は、貨幣価値で計算できない豊かさ、例えば自然、もちろん歴史、施設、教育制度とか、もろもろのものを試算してみますと、東京をゼロとした場合、どのぐらいになるのかというと、山陰地区では実を言うと５０万のプラス要因があるよと。

東京と山陰とは、山陰といいましても、米子も倉吉も境港も松江もほぼ同じ、似たり寄ったりで、実を言うと、東京よりもはるかに山陰のほうが物の豊かさがあるよということです。いろんなビジネスチャンスとか、そういう問題はちょっと抜いていますが、何を申し上げたいかと申しますと、若い人たちが猫もしゃくしも全部目線は関東に向いているわけです。また、中部圏でありますとか関東に向いている。流出も、人口も毎月のように何十人、何百人と出ていっているわけです。この点を皆さんの間近な方々から攻めていっていただけないでしょうか。鳥取はいいところですよ、何のことはない、損得からいいましてもはるかに都会よりもいいのですよということを感じさせていただいて、きょう会議に進めさせていただこうと思っています。ありがとうございました。

○太田政策企画課長

ありがとうございました。ここで深澤市長は退席させていただきます。

９　議　　事

○太田政策企画課長

総合企画委員会条例第４条第２項の規定によりまして、議長は委員長が務めるということですので、安田委員長よろしくお願いいたします。

（１）協議事項①鳥取市人口ビジョン（素案）について

②鳥取市創生総合戦略（素案）について

○安田委員長

本日の進め方ですが、まず、鳥取市の人口ビジョンの素案、これを事務局から説明していただき、それから２番目、鳥取市創生総合戦略の素案について説明をしていただく、個別な質問はそれが終わってからにしましょう。それで、３つの大きな課題がそのまま残っておりますので、その点を重点的にさせていただいて終わらせていただくという進め方にしたいと思います。質問をいろいろお持ちだと思いますので、質問はまとめて、素案の説

明をいただいてから質問、それから自分たちの思い入れ等々をお話ししていただいたらと思います。よろしいですか。それでは、よろしくお願いいたします。

○事務局説明（塩谷創生戦略室長）

資料１、２に基づき説明（略）

○安田委員長

ありがとうございました。

これから、大きなテーマですけれども、個別の問題について皆さん方の御意見をお伺いしたいと思っています。まず、ひとづくりの点から、これはという御意見がありましたらお聞かせ願いたいと思います。

○西村委員

先月、私、用事がありまして新潟県新潟市に１カ月ほど滞在しました。息子夫婦が子供２人目を産み、それで３人目はどうかという話をしますと、新潟で産むと３人目は２００万円いただける。すごく具体的な話が出まして、新潟は平均３人のお子さん、子だくさんの市であると聞きました。そういった具体的なやり方とか、そういうところに行って勉強するとか、お考えはないのかなと思って、具体的な何か案があれば、若い方は魅力的に感じるようで、２００万円にすごくうちの子供たちが引かれていたものですから。

○安田委員長

西村委員からの質問です。海外ではもっともっと出る国もありますし、もちろん教育費は無料、１８歳まで無料だという外国もあるようでございますが、いかがですか。

○下田健康・子育て推進局長

出産に伴う給付金は、実は合併前にも各町でこういう給付をやっているところがありました。しかし、現金をこれぐらいの金額でやるというのは財政的にもなかなか大変な面があるということで、当時ゼロにして、今、鳥取市では逆に保育園の利用の軽減を行うこと、第３子以降を無料化にするとか、２人一遍に入っておられると国の基準では２分の１を４分の１にするとか、ふだんの生活の中での軽減のほうに努めております。以上です。

○安田委員長

よろしいでしょうか。勉強しろということですね。

○西村委員

勉強していただきたいですし、ヨーロッパ諸国は、やはりさっき委員長がおっしゃったとおりに、学校の学費に対する心配がないという国が多くて、各国で出生率が上がってき

たということもありますので、是非そういうことを参考にして、子供が増えれば人口が増える、人口が増えれば仕事が増えるという、そういった連鎖を長い目で見て、１０年先、２０年先を見てお金を使っていただきたいなという気持ちです。

○安田委員長

そうですね。以前申し上げたかもわかりませんが、ソフトバンクさんは、子供が５人できると１，５００万もらえるみたいですね、日本の企業ですよ。そんな企業もあるよということで、何せ出生率を上げないとだめなわけですが、やっぱり２人ないし３人はつくるような素養を国全体、また、県、市でつくっていかなければならないなと。今、西村さんがおっしゃっているように、新潟を一遍勉強されてはどうですかというのは、そこらの話も含めたところだと思います。

○松本（壽）委員

子供の問題からちょっと離れます。ひとづくりの戦略の中に英語教育というものが書いてあります。次世代を見据えた特色ある教育の推進ということで、ＩＣＴの活用や英語教育の推進とあります。このあたりで私は、今、中学校のＡＬＴを小学校の授業になど、いろいろ鳥取市も工夫されているけれども、３年生から推進されるような状況になってきますので、今の５、６年生だけではなく３年生から英語教育が入ってくるということは、とても大きな変革なのです。そのときに、中学校区でやっていくというこのシステム、これもいいのですけれども、やはり英語専科の先生を小学校の中に入れていくという発想をしていったほうが、より充実してくるかなと思います。

底上げといいますか、小学校教員が持っている力を英語教育で活用しようとしているわけですけれども、研修とかいろいろで、専科の先生をどんどん小学校に入れていく、１人でも２人でも入れていかないといけないのではないかなと思っています。中学校はもっとレベルアップした授業内容が求められているわけで、中学校の先生は高校の水準に合わせていかなければいけないという状況が起こってきているわけです。ですから、今あるものを最大限にという感覚ではなくて、もっと留学をする機会があるとか、それからモデル校をつくってと書いてあるのですが、小学校の英語をどういうふうにしようかと考える主事であるとか中学校の英語専科の先生を入れていくことが私は望ましいと思っております。よろしくお願いいたします。

○尾室教育委員会事務局長

今、松本委員が言われたように、小学校から英語が今度また教科になりそうな動きもあ

ります。鳥取市では、中学校の先生が小学校のほうで授業を行うことも実際やっています。ただ、まだ英語に特化した形での授業ではなくて、各中学校区で小学校と中学校、両方教えることができる兼務教員を全ての中学校区に配置して、今、さまざまな教科でその取り組みを始めたところです。言われたような意見を参考にしまして、英語についても、また何らかの検討をして力を入れていきたいと考えています。以上です。

○冨岡委員

先ほど触れられましたが、５ページの一番上に大学でのＣＯＣプラスのことが載っております、次世代を見据えた特色ある教育の推進ということで。特に質問というわけではないのですが、現状をちょっと御紹介しようかなと思います。

私、環境大学で今、４年生のゼミ生を複数名持っております。その中で、鳥取出身の人は、鳥取でぜひ就職先を見つけたいと動いている人が複数名、非常に熱心に動いています。ただ、他府県から来た人は、自分のふるさとに帰りたい、ないしは東京や大阪のような大都会で就職したいという、当然といえば当然のことですが、そういう傾向がやっぱり非常に強く出てきています。鳥取で他府県の人に就職してもらうためには、今日の全体のテーマでしょうけれども、鳥取にいて、特に若者の場合、魅力ある仕事がないとやっぱりなかなか難しいだろうというのは、当然あります。それと、鳥取にいて生活したら何かやりがいがあるといいますか、おもしろいなといいますか、そういう思いを持ってもらわないと、特に他府県の若者たちを引きつけるというのはなかなか大変かなという印象を持っております。とりあえず今のところはそれだけです。

○安田委員長

ＣＯＣに関してはよろしいですか、の推進に関しては。

○冨岡委員

今やっております、内部で一生懸命。

○塚田委員

先ほどの先生のお話を受けて、私ども、５年ほど前まで１０年間ぐらいＳＡＫＹＵ自由学園といいまして、砂丘を舞台に子供たちと、それから環境大学や鳥大の学生さんもいらしたのですが、一緒にキャンプをしていました。郷土愛を育む教育の推進ということは、それは砂丘で子供たちがなかなか遊ぶことがない、特に親たちが忙しいので、そういうアクティビティーをつくっていたのですが、その中に環境大生、島根の出身だったのですが、鳥取に就職された方もあって、やっぱり教育という形で、ジオパークはいいなと教えるの

も大事ですけれど、そこで何をして誰とどう遊んだかということがすごく大事ではないかと思います。

例えば、一旦都会に出て働いて、やっぱり鳥取がよかったという、小さいころにそういう楽しい体験をたくさんしている子たちが、就職先は、収入が落ちるけれども帰ってきたという子もいますし、それから、地域で子供たちを育てるという、学校教育だけではなくて、みんなで鳥取の自然を使ってキャンプをするとか、今、子供会でもキャンプをする子供会はほとんどないのです。私どもは松保地区ですが、必ずキャンプをして、この間も岩美のいこいの里でキャンプをしました。それには、やっぱり人的な協力、地域の方々の協力、お父さんたちの協力がすごく必要です。そういう楽しい思い出をやっぱり小さいときにいっぱい植えつける、それから大学生にもそういう活動に参加してもらって、鳥取はこんなにいいよということを体験してもらうということをもう少し何かできればいいなと思ってやっていますで、そのこともぜひお願いしたいと思います。

○安田委員長

鳥取市の方にはどういうお願いをされたい。

○塚田委員

キャンプ場の整備と……。

○安田委員長

キャンプ場の整備、ちょっとひとづくりからは少し外れますが。

○塚田委員

はい。でもせっかく自然があるのに、どうやって遊んでいいかわからない。鳥取市には大型児童館がありませんので、公民館単位で異世代間交流などしていますけれど、子供たちに、同和対策の児童館はありますが、もっと大きな、一般の子供たちも利用できるような児童館、それから子育て支援、小さい人には結構手厚いのですが、小学生、中学生、高校生の遊びというか、いろんな体験ができるような施設がないので、やっぱりそこら辺でぜひ、自然でどうやって遊ぶかというのを多分親たちも知らないので、もっとそういう鳥取のよさをアピールできるような施設なり、それから企画をして、そういう仕掛けをしていただけたらと思います。

○大田経済観光部長

市内には、鳥取市がやっています柳茶屋のキャンプ場、これは古くなってどうにか直さなければいけないなというところがあるのですが、それと安蔵があるということで、確か

にキャンプ場は市内には少ない状況はありますが、東部一円ではいろいろありますので、そういうところの活用かなと考えていますが、砂丘でも、今、民間とキャンプ場をどうしていこうかと、整備できないかという検討も行われるところです。

御指摘のあった、やっぱり子供のころからいろいろ遊んでいただけるというのは非常に鳥取の思いが強くなるということで、小さくはないですが、大学の合宿なんかもよく来られております。吉岡とか山紫苑とかよく来られていますが、昔、鳥取に行ったよという話もありますので、やはりそういう整備を少しずつしていく必要があるのかなとは思っています。

○下田健康・子育て推進局長

公共施設の活用のあり方はいろいろあると思います。塚田委員が言われたように、外で遊んでいただくというのも一つの方法だと思いますし、公民館や、さらには、市のほうでいろんな公共施設のあり方の見直しをしておりますので、そういう中で利用できるものがあったらということで、またいろんな意見をいただきたいと思っております。

○塚田委員

施設の充実も大事ですが、そこに誰がいるかという、専門の人をぜひ……。インストラクターのような、プレーパークでも必ずそういう人たちがいますので、そういうものをもっと充実、そういう視点が余りないなというのはいつも思います。

○下田健康・子育て推進局長

塚田委員などのグループに実際はお願いをして、いろんな子供たちの楽しみ方ということで今はお願いしている状況です。またいろんな御意見をいただきたいと思います。

○安田委員長

なるほど。昔はよくボーイスカウトさんとか、それからガールスカウトさんに先生方、先生というよりも、デンマザーなんかがいらっしゃって、そんな方々が結構専門的な遊び方をお持ちなので、そこらあたりはどうなのですか。

○塚田委員

私は、鳥取市レクリエーション協会でレクリエーションコーディネーターをしております。今、多いのは、とにかく高齢者の健康維持のための依頼が多くて、子供に対する依頼はほとんどありません。やっぱり若い保護者の方が、集団で遊ぶ楽しさみたいなものを余りもう知っておられないし、それに手が回らないというのが実情なので、ぜひ鳥取市の自然を生かしてどう遊ぶかというところをもう少し視点に入れていただけたらと思っていま

す。高齢者にはとても手厚いのですが、子供たちにもう少しそういう視点があればいいと思います。

○上山委員

郷土愛を育む教育の推進というところの一番下の「すごい！鳥取市」による魅力ある住みやすいまちの情報発信という項目があります。ここの基準値が媒体広告換算１６倍、これを平成３１年には２０倍以上でサポート制度の登録数が７００人というのが目標ということでありますが、「すごい！鳥取市」ということで、ショッキングピンクのエレベーターのところのあの色とか「すごい！鳥取市」、すごいなあと思っていたのですが、これがどこに行き着くのかなというのが、私が情報を集めてなくてわからないのかもしれませんが、こんなことがすごいよ、これがすごいよ、すごいよ、では、そのすごいのはどこにどういう形で着地するのかなというのがちょっと私に見えなくて、せっかく情報発信をするのだけれども、それが住みやすいまちの情報発信になり得るのかどうかというところが私は不安というか、疑問に思っているところがありますので、お聞かせ願えたらと思うのですが。

○田中企画推進部長

「すごい！鳥取市」ということで、昨年度から、まず３年計画で、今はホームページなんかで「すごい！」１００ネタの発信ということをやっています。これは、「すごい！」ということで外向けに出していますが、実際には、鳥取市民に、自分のところのこういうことがすごいのだというものをお知らせするのと、あわせて、今は市民の皆さんからもどういうものがあるか我々のほうに教えてくださいと、双方向でやっていまして、これはひとづくりの鳥取市の郷土愛の醸成ということにも一役買って、両方のものを含めてやっているところです。

どこに行き着くのかなというところですが、当然狙いは、鳥取市というものの知名度アップも含めて、まずはいろんな外向けアピール、さっき言いましたが、住民の皆さんのほうの郷土愛醸成ということで、まずはそういうところを狙いながら３年計画でやっているという状況がありまして、関東、関西のマスコミなんかも使いながら、また、知事もいろんなことに一役買っていますけれども、これ等を含めて総合的な戦略という位置づけをしています。

○上山委員

それについて、登録が７００人という数字が上がっておりますが、この登録者、団体な

り人なりなんなりはどこかでまた、この人らが再登場してまちを活性化するということにつながるのでしょうか。

○田中企画推進部長

どんどんどんどんこれは登録していただいて、無責任なあれかもわかりませんが、とにかく広めていくということをまず主眼に置いています。

○安田委員長

それでは、第２の戦略でありますが、誰もが活躍できるしごとづくりのテーマで御審議を願いたいと思います。

○小野澤委員

具体的な施策の（１）工業の振興というところが気になります。先ほど、企業がないとかではなくて、今、本当で自動車関連、航空関連、今度、医薬品業界といった進出が決まっていますし、５月の委員会のときでも、これから数年で１，８００人ぐらい雇用が必要になるということもありますので、ぜひ雇用の確保という意味で、先ほど環境大学の方もいらっしゃいましたけれども、やはり地元で働きたい、２割の方が働きたい、これは非常にうれしいことですし、私は、製造業の雇用確保ということでは、やはり実業高校生を１８歳で卒業して県外へ出ていくのではなくて、何とか県内に残すようなことも必要ではないかと思っています。

例えば鳥取工業とか湖陵高校の生徒さんをぜひ、地元の優良なといいますか、製造業にそのまま残っていただいて結婚して家庭を持ってもらったら一番いいのではないのかなと思います。１８歳で本当に企業を知らないということが多々あると思いますので、進出企業の本社を親子で企業見学するとか、それは行政が費用を負担するとか、それもいいと思いますし、例えば進出企業に対しては非常に多額の補助金を県、市は支払ってらっしゃいますので、逆に、雇用をあっせんした県立高校等にインセンティブ、補助金を受けられるかどうかわかりませんが、そういったものをつけていくのも必要なのではないかと思います。企業側としましては、いい会社と言うのは失礼ですが、福利厚生等の充実も必要ではないかなと思いますので、そういう福利厚生、今いろんなメニューがそろってきています。費用がかかるメニューもそろってきていますけれども、そういうのを行政の一部負担とか、そうして企業の優良化といいますか、その会社へ入りたいと思わせるような施策を打っていただくのも一つではないかなと思います。

○大田経済観光部長

小野澤委員の言われるのはもっともだと思っており、本市としても、実業高校にはハローワークや県と一緒にいろいろ協議したり回ったりということをしていますし、雇用促進協議会というのを鳥取市は持っているのですが、その中で、希望される高校に対して、いろんな企業のほうにも行っていただくということもしているところです。今後、進出企業が新しく来ますので、そこら辺も柔軟に高校の先生と相談しながら、また見てもらったり、親と一緒にということもありますので、そういう企画もしてみたいと思います。なかなか高校に対してインセンティブの補助というのはちょっとどうかなというのはありますので、それは御意見ということにさせてもらいたいと思います。

そのほかにも、互助会とか、やっぱり福利厚生を充実する必要があるということで、安田委員長が会長で私が副会長ですが、そういう互助会施設の部分のひまわりというのもあるのですが、中小企業の福利厚生を支援する、そういう施策も鳥取市としても行っているところです。以上です。

○白岡委員

私は東京からの移住者で、仕事に関して、よく移住するときに仕事がないからと諦める知人も多かったのですが、私が移住したのは、在宅で仕事をしておりまして、インターネットさえつながっていれば東京や大阪を相手に仕事ができるので、その点で特に問題ないと思って移住してきているのですが、やっぱりそれでも、鳥取市内とか鳥取県内とかという中で仕事をつくっていくというのはなかなか難しいので、今でも都市を相手に仕事を探さなければいけないのですが、その際にハードルになるのはやっぱり距離で、例えば東京に飛行機で出ると往復で安くても３万とかかかるので、それだけのコストをかけて営業に出るべきかというのをよく悩んだりするのですが、そういう特に移住者で、都会の通勤電車に揺られる仕事に疲れて移住してきて新しい働き方になったときには在宅でという人は多いと思うのですが、そういう自営業者が都市部の仕事をとってくるということに関して、例えば県が飛行機で移住に関しての行き来はちょっと補助が出ますよとか、そういうのがありますが、何か少しサポートをしてもらえるような仕組みがあったり、仕事をよりふやして収入をふやしてという仕組みができたらなという、個人ではなかなか打開できないところは何かサポート制度があったらいいなとは思います。

○久野地域振興監

移住定住の窓口をしています。本市としても、そういうサポートができればと思いますが、なかなか個人に対してのサポートは政策的に非常に難しいところだと考えています。

２６年度までの登録、ちょっと話が違うのですが、企業への登録、就職してもらった場合に、都市部から鳥取に住みついた場合に１０万円支給します。これは移動費みたいな形で、子供さんとか家族で最大２０万円まで支給しますという制度を３年間設けました。結構若者が帰ってくる一つの要因になったと思っていますが、こういった個人支給的なもので、なかなかこれを続けるというのも非常に難しいと考えています。

実は、今、個人の起業・創業、いろんな例えばデザイナーであるとか作曲家であるとか、田舎でも創造的な仕事をしながら都会に発信するということで、ネット環境の整備というのもかなりできつつあるので、そういった仕事を鳥取でされている方も何人か知っております。もっと中山間地域全域でも、そういった環境整備をしていく必要があるのは一つの課題として認識しているところです。河原のあたりは光の環境は整備できていると思いますが、まだ全域できてない箇所もあるので、そういったことも政策的に進めていきたいと思っているところです。ありがとうございました。以上です。

○安田委員長

今、白岡委員がおっしゃっているのは、環境整備よりは、要はよりインセンティブというか、そっちのほうをもうちょっと何とかしてよという話に聞き取れたのですが。

○白岡委員

はい、そうです。うちに関しては、通信環境はすごく整ってきているので全く問題なくさせてもらっているので、それから先の話を、自分で頑張れよという話だと思うのですが、それがあればなという希望を言ってみました。

○安田委員長

県の職員の方が東京に出張するときは、市も同じなのでしょうが、飛行機で往復というのはもちろん費用が出ますよね、職員の方々。それに今度は、そういうスキルを持っている方々が出るについて、例えば３万円のうちの片道だけは何とか見ましょうかという制度というのは難しいのですか。特定の個人に対してのどうのこうのというのはやっぱり難しいのですか。

○久野地域振興監

おっしゃる意味はよくわかっていまして、インセンティブということなのでしょうけれども、委員長もおっしゃっていますが、何を基準にしてそれを出すのかと。当然仕事で我々が出るのはあくまで仕事ですから、それは必要経費ということでやるのですが、多分難しいのはわかっておられてのお話だと思うのですが、はい、わかりましたみたいな話に

はなかなかならないのは大変あれなのですが、そういうことです。

○白岡委員

よくわかりましたし、わがままなことを言っているのですが、前に、これはどこの管轄かわかりませんが、東京のウエブ上の広告をつくっていらっしゃる会社の方が全国に登録者をつくってデザイナーを登録して、東京ではこなせないぐらいの数のウエブ広告の仕事をどんどん回してくれるという仕組みをつくっている会社の方が説明に来られて、それだったら地方でも仕事ができるからというので、その辺の勉強会を無料でしていただくみたいな仕組みがあって、私はそれを利用させてもらうことにしたのですが、そういう情報もどんどん手に入れられたらと。とにかく自営により家でこつこつ仕事をしていて、なかなか都市の仕事がとってこられなくて困っている人がいるということだけわかっておいていただければということで。

○小谷委員

冒頭、安田委員長がおっしゃられたことと、それから今の白岡委員の悩みもあわせて、やっぱり鳥取市が、こうしたいというビジョンがありながら、個人に支援はできませんというのは、これはどうかと思います。個人に支援ができないのならば、今、確かに白岡委員がされているような、企業誘致ではなくてサテライトオフィスみたいな感じで、個人で、いわゆるＳＯＨＯというやつですね、やるのが移住定住者には多いはずなので、そこに何か支援をしていただかないといけない。それは個人ではなくて、では、移住定住者、例えば組合をつくる、組合に支援すると。出張で業務出張になるなら、行ったときは、その出張報告なり経費の明細をつけて翌月３分の１とか半分を支給とか、何かそういう道筋をつけないと、書いてあることは立派だけれども、これだったら移住定住は増えませんよ、と思います。

だから、そこはもう少し真剣に考えていただきたいのです。今の制度がこうだからできませんと言ったら、これは絶対増えません。なぜならば、企業誘致も限界があるのですが、やっぱり２０代、３０代で若者を何とか引っ張ってこようと思ったならば、やっぱりそういうサテライトオフィス、ネット関係の仕事をされている方が多分多いと思うのです。だから、そこに向けての今の現在の仕事の流れといいますか、そういうものを見ながら次の手を打っていかないといけないと思います。

それからもう一つ、安田委員長が言われた、冒頭、日銀の松江支店のレポートのことですが、Ｕ・Ｉ・Ｊでひっかかるのは、配偶者とか家族の説得だと思います。今、例えば目

が行きそうなのは、年収であったり、生涯賃金であったりするのですが、委員長がおっしゃった、いろんなお金にならない価値というものに対して差がほとんどない、あるいは勝っているということをどういうふうに具体化して見せるかということが非常に大事だと思います。確かに日銀のレポートは、それはそれでいいのですが、それが移住定住しようかという人に対しての説得力はまずありません。

○安田委員長

発信せねば。

○小谷委員

その情報発信の仕方が非常に大事で、これは多分恐らく年代に分けて発信の仕方を変える必要があると。例えば白岡委員のような若い方、あるいは日銀のレポートの標準にあった、３０代でお子さんが２人いて、しかも学齢前のお子さんがいてという年代、それから４０代は、多分、都会にいる企業の人たちはとてもそこまで考える余裕がないと思うので、人生とか会社生活の終わりが見えてきた５０代からが勝負だと思うのです。そのときには、恐らく何かこれから先のことを考える余裕があるのと、それなりのスキルなりキャリアがあるので、この５０代以降の人というのは引っ張ってくる狙い目です。２０代、３０代、５０代の人というのは、多分おのおののフェーズが、帰ってくる動機にしても違うはず。５０代の人については、ある程度の貯蓄もあるだろうから、あるいは先が見えているだろうからどうだというのがあると思います。その辺を具体的に示してやらないといけない。

例えば３０代で学齢前のお子さんが２人いるのだったら、学校の授業料の制度はどうだとか、少人数学級でどうで、その辺のメリットはどうだと、お父さんが早く帰るようになって残業時間は都会に比べるとずっと短いと、だから、町なかは暗いけれども、暗い分だけはやっぱり家でしっかりやるよねという。それから食材にしてもそうですよね、どこのものだかわけのわからないものはなくて、どこかに行けば大抵地元のものがきちんと新鮮なやつが手に入るとか、そういったことをもう少し定量的な情報発信をしないと、多分家族の説得がならないと思うのです。そうした上で、今のような、例えば移住者に対する組合みたいな制度ができれば、そこでそういう支援ができれば、もう少し向いてくると思います。もう少し知恵を絞って考えていただけないかな。恐らく鳥取市さんだけでは無理だと思うので、官民挙げて、例えば近々にＵ・Ｉ・Ｊターンした人とか、あるいは転勤族で家族と来ている人も少なからずいるはずなので、そういう人たちの情報といいますか、聞いたりヒアリングしたりして、もう少し細かいレベルの情報発信をする必要があります。

以上です。

○安田委員長

ありがとうございます。やっぱりそれを考える必要があると思う。インセンティブがどうのこうのというよりも、何だかんだいいましても、誘致企業に対するかなり多額の、具体的には申し上げませんが、そういう補助をなさっている。個人も、わざわざこの地に来て、この地で住もうかと思っていただいているにもかかわらず、いろんなハンディキャップをお持ちだと。それに対するネットワークづくりも当然必要でしょうし、それから、それに対する措置、人間関係も含めてやる必要があると僕自身も思いますので、ぜひこれは少し具体的な方法を皆様方の中で、幹部の方々がいらっしゃるので、ひとつ前向きに検討していただきたいと思います。

○大田経済観光部長

私のほうから補足いたします。個人の会社にも支援が、誘致企業だけではなしにありまして、例えば先ほどの話の中で、販路の開拓、拡大のときはビジネスマッチングというのがありまして、国内は３０万円、海外は５０万円と。ただ、これは大きな展示会とか商談会等に出席するという補助になっておりますので、個人が動かれるのは補助の対象になりませんが、先ほどの意見も踏まえて、そこら辺を少し検討したいなという点と、それともう１点は、起業家だけではなしに、ことしから、クラウドファンディングといいまして、資金をほかから調達する仕組みもつくっております。これに対する支援も行っておりますので、何か企画的につくられてクラウドファンディングに、ＦＡＡＶＯ鳥取というのをつくっていますので、そこに上げられて、ほかから資金を調達するという仕組みもあるのかなと思っています。何よりも教育関係、ことしもＩＣＴ関係の専門の雇用創造協議会というのがあるのですが、これから３年間、そういう専門の方も来ていただいて、個人の企業さん、事業者さんも研修していただくようなこともやろうと思っていますので、ぜひそういうところにまたお声をかけさせていただきながら、やはりネットワークだと思います。東京は確かにＩＣＴ関係の仕事がいろいろあると思いますので、それをどう結びつけていくかというのは、きょうの御意見を聞いて、また考えてみたいと思います。以上です。

○尾崎委員

文化芸術を生かした個性あるまちづくりの推進の中の手仕事の新設の分ですね、基準値が書いてないのですが、手仕事の作家の移住推進による工芸村の開設という項目があって、いいなあとは思ったのですが、現在どういうことを考えられていて、現在の状態を教えて

いただけるとうれしいと思います。何かここから広がりそうな予感はありますけれども、やはり具体的なことがきちんとできていないと、せっかくやったけれども広がらないとか、そういうところを使ってまた文化が広がるとか、いろんな可能性があるのではないかなと思って見させていただいたのですが、ちょっと教えてください。

○田中企画推進部長

工芸村ということで、これは例の商工会議所さんのほうからいろんな提言をいただいて、この中に一つ入っていまして、具体的には、河原の西郷地区のあたりで人間国宝もおられてということで、そういった陶芸関係といいますか、こういったもので一つ目玉をつくりたいと。ここの目標値のところに書いてありますが、地域、鳥取県、鳥取商工会議所などと連携しということで、これはまだ具体的なものが出てきてないということで、実はこれは地域のほうがいろいろ考えておられて、要は県や市が押しつけるような話ではないので、まずそことじっくり連携をしながらやっていきたいということで、具体性はまだないのですが、一応そういった大きな、非常に目玉的な問題でもあるので、ここに位置づけているということです。

何らかのことはやりたいなということで、実は今年度になりましてから、西郷のむらづくり協議会のほうに空き家の活用の委託を鳥取市がさせていただいて、これもこういった伏線的なものがありまして、よそから来ていただくのに住まいの問題が要るということで地元のほうからも要望があったものですから、まずそういったものを鳥取市が地域と一緒にやっていっているというところで、その後、いろんなことをまた考えていくのかなというところです。

○安田委員長

よろしいでしょうか。

○尾崎委員

いいです。ぜひ頑張っていただきたいと思います。

○安田委員長

茶谷さん、中小企業団体中央会で何か仕事づくりみたいな形の組織があるように聞いているのですが、何の話かわかっている。ありませんか、そういう中小企業団体中央会の中で共同でいろんな仕事の……。

○茶谷委員

あたらしやですかね。あたらしやというのは、中小企業団体中央会の企業同士でコラボ

レーションできることはないかというのを積極的に議論しまして、その中で販路拡大、また、協力して新しいことができないかというのを団体中央会の中で新しくやっているところでございます。私も入会してまだ１年たっていませんので、余り偉いことは言えませんので、まだ勉強中ですが。

○安田委員長

これは、３年前になるのですが、鳥取県中小企業団体中央会がいわゆる若い人たちの育成というのでしょうか、人材育成の一環として、メンバー同士の中で企業間の連携をやっていきませんかという話をさせていただきました。今、ほぼ、かなりの商い額が年間で、１，５００～１，６００万ぐらいのお金がやりとりされているという話をちょっと披露させていただきたいと思います。

○下山委員

鳥取大学の下山です。大分最初ですが、企業誘致により製造業で県の高校生を就職させるというお話があったのですが、大学生のことを考えてみると、大卒でも就職できるような企業誘致もしていただけたらありがたいなと思いました。

○安田委員長

ちょっと言葉が理解できていないのですが、大卒の文系、理系。

○下山委員

私は文系ですが、理系の例えば工学部の方でも考えたら、製造業でもやっていけるとは思うのですね。

○安田委員長

いやいや、すごい。うち、求人しているにもかかわらず来てくれないから。給料も結構高い給料を表示したのですが、地域間格差を是正しようと思って大卒で１９万円の求人を出したら、ゼロでした。物すごいショックを受けているのです、給料ではないのかなと思ってみたり。いや、大卒の方々で理系の方々は毎年のように採用させていただいていますが、それがもうできないのであれば、環境大学さんにお願いして、来年からは環境大学さんで非常にＣＡＤとかＣＡＭに興味のある方を採用させてもらおうと。試験的に、ことし１人、環境大学さんのＣＡＤに興味があるというだけで就職を今してもらいました。まだ入ってから間もないのですが、何も大学の理系を出て図面が描けないことはないはずであると、文系の方でも建築学部の方はＣＡＤなんていう３次元をやっていますから、十分。やっぱり特性を生かしたものをやっていかないとだめなのかなと。

○下山委員

私がさっき話した話なのですが、今、就活の真っ最中の４年生の工学部の先輩、理系の方とか、農学部の理系の先輩と話していて、文系も結構厳しいのですが。あと、研究職とかも鳥取市にはあるのかなと。

○安田委員長

ありますよ、それは幾らでもありますから。

○下山委員

そうですか。

○安田委員長

僕らのＰＲ不足かもしれませんね。若い方々がどんどん向こうに目線が行っているばっかり思っていたのですが、掘り起こしが足らないということで自戒しました。もっとＰＲします。

○谷上委員

１点ですけれども、次世代を見据えた新規創業・就農等の充実ということで、９ページですけれども、一番上のとっとりふるさと就農舎等を通じた新規就農者の育成確保と就農定住に対する支援ということですが、現在、農家の方、佐治を含め、全体もですが、農家の方が高齢化しておりまして、ちょっと質問になるのですが、高齢化した農家さんのほうに直接農業をしたいという人が入れるような仕組みというのは考えられたり、そういった検討を今までされたのかなというのをお聞きしたいのと、そういったことは実際できるのかどうかというのを質問したいと思います。今、ふるさと就農舎を通じてとなっているので、実際、直に農家さんに入って農地を受け継いだり、現在も梨とかであれば、もうそのまま入れるような農地がたくさんあると地元で思っているので、御意見をお聞きしたいです。

○井上農林水産部長

先ほどありましたように、農家のほうに直接行かれて、そこで研修を受けて就農していただくことも可能です。その方々にも就農時に、例えば機械設備が要るということであれば支援させていただいている。ふるさと就農舎というのは、東京とか大阪へ行って、こういったところで農業をやりませんかというＰＲをしながら、そこに来ていただいた方々に最初の取っかかりとして研修を受けていただく施設としてやっています。

最近、特に果樹を志向される方がちょくちょくありまして、こういった場合は、梨の生

産の場合は、苗を植えてから収穫するまでに３年とか５年かかると、それまでは投資ばっかりということになりますので、とても新規の方が即、果樹生産、果樹農家になるというのは不可能に近い状態だと。先ほどもありましたように、できれば果樹をしたい方については、農家の方あるいは地域全体で、もう何年かしたらやめなければいけないと思っているけれども、そういった人に来てもらえるような受け皿を地元でつくっていただくと、そういう方々にコンタクトをして来ていただいて、いえばお見合いをしていただいて、両者納得ずくで果樹生産がしていただけるという形もとりたいと思っています。

○安田委員長

最後の問題です。まちづくりについて協議をさせていただきたいと思います。

橋本学校長から、一言お願いできますでしょうか。

○橋本委員

私のほうは、最初、ちょっと一言、最初の５ページです。次世代を見据えた特色ある教育の推進で、鳥取市医療看護専門学校の奨学金制度を設ける、本当にありがたいと思います。右端のところに目標値が１０％になっていますけれども、私たちは４０％か５０％を考えていますので、遠慮せずもっと入れていただいたほうがいいと思います。なぜかというと、今ちょうど出雲が、学校は大体地元に８０％定着します。そうすると、７０％でも１４０人が地元に定着しますので、もうちょっと元気よくずうずうしく言っていただいたほうがよろしいかと思います。本当に感謝しています。

それと、もう一つ前に、グローバルな次世代を見据えた特色ある教育の推進のところで、留学生の就職支援による企業の国際化と競争力の強化及び高度外国人の人材の定着化ということで、私のところに毎年、中国を中心としたアジアの学生が１カ月研修で２００人ぐらい来ます。来年度から毎月、二月に１回ぐらいは１泊でこの鳥取か山陰へ持ってこようと、学生交流して、学生交流すれば定着してくれるかなと、人材の定着ということで、ちょっと描いております。またこれも支援してまいりたいと思います。

あと、まちづくりのところですが、住みよい環境づくりのところで健康寿命につながる住みよい暮らしのところで星印が３つついていますけれども、２つは、鳥取市医療看護のほうで協力できるかなと。レクリエーションや福祉用具の相談員の講習会、痴呆症、在宅医療、地域包括ケアも大阪のほうでノウハウがありますので、何かありましたら、この２つともお申し出いただければ、若者の教育等々に御協力していけると認識しております。鳥取市が医療と福祉で困らないまちづくりを後ろで支えていきたいと思っていますので、

何かあれば申し出てください。よろしくお願いします。

○安田委員長

ありがとうございます。力強い言葉であります。感謝しております。

○平野市立病院事務局長

どうもありがとうございます。１０％と書いてありましたが、当院といたしましては、看護師さんはもう喉から手が出るほど来ていただければと考えておりますので、よろしくお願いします。

○橋本委員

病院からもたくさん先生が教えに来られています。半分ぐらいは多分希望者はいるのではないかと見ていますので、日ごろの御支援をお願いしたいと思います。

○松本（弥）委員

気高のまちづくり協議会の松本です。現在、今３児の母として言わせてもらえば、余りにも小学生が忙し過ぎて、地域の活動に参加させることがほぼ難しいです。学校の行事も２学期制になったおかげで全部後期に偏ってしまったり、今までだったら、２学期制だったので夏休みを挟んで準備をしたりできたものが、とりあえず夏休み期間にスポーツの大会があって、ほぼほぼ毎日練習で、週末のたびに保護者がもう必要以上に首も手も全てを突っ込んで子供の事業に参加するみたいなことになっているので、親も子も忙しいです。

スポーツ指導者ということで私も２０年近く前に卓球の指導をしていたのですが、その研修にも行かせていただきましたが、やっぱり学校が終わるのが３時半過ぎぐらいで、それから子供たちは遊ぶ時間があると思うのですが、３時半から暇な大人は、仕事をしていてなかなかないと思うのです。そうなってくると、どうしても５時以降のスポーツ指導になって、申しわけないですが、地元で就職していらっしゃる公務員の方ですね、市町村職員さんとかがその指導に当たってくだされば、５時１５分、５時半ぐらいから子供の指導に当たってもらえるのですが、鳥取市とか、それとか私は気高なので倉吉市とか、通勤に３０分以上かかるような方が指導に来られると、遅くても６時、６時半ぐらいから練習スタートで、夜の７時半、８時まで練習ということが多々あります。それはどの部でもそうだと思いますが、そういうのを軽減してもらえないと、週末のたびに試合が入ったり、夜遅くまで子供たちに練習させたりとなってくると、子供にも体力的に負担だと思いますし、親にも負担です。

子供が少ないから、親が子供に全神経を注いでそういう事業に参加するのか、子供がか

わいくて事業に参加するのかわからないですけれども、余りにも親が首を突っ込み過ぎなので、親のほうの指導を何とかしてほしいなと。ここで言うことではないのですが、余りにも子供の自主性を奪っているのかなというのが、保護者として、子供をスポーツ団体とかにも入れていたのですが、常日ごろから感じていることで。そうかといって、何か整えられた環境の中で、これをして遊びなさいと言ったら子供たちは遊ぶと思うのですが、何もないところで遊びなさいと言ったとき、どう遊んでいいかわからないという子がほとんどで、まちづくりのほうで事業をしても、そういう活動に対して、こういうことをしますので集まってくださいと言ったときに、わざわざちゃんと準備していることに対しては参加してくれますが、もう根本的なところで人がいません。週末のたびに、済みません、どこそこの部はどこそこに行って野球の試合です、バレーはあそこで大会がありますみたいなので、結局出てくるのは本当に保育園とか、小さい子ばかりになってしまって、魅力のあるまちづくりをと言われても、なかなか子供に対してどういう魅力なのかなというところは感じています。

自然なんかにしてもそうですが、遊ぶ場が与えられているとは思わないのですが、私たちが子供のころと今の気高の環境がどれだけ変わったかというと、ほとんど変わってないと思います。田んぼもあるし、畑もあるし、山もあって海もあって変わってないのですが、保護者の考え方が変わってしまったがために、あそこで遊んではだめ、ここで遊んではだめ、あっちの大会に出なければいけないからみたいなことで、みんな大人のほうが、言い方が悪いのですが、芽を摘んでしまっているというか、与えられたことだけをしてればいいよみたいな育て方になっていると思うので、何かその辺が何とかならないかなというのは常に思っています。

○安田委員長

ちょっとお尋ねですが、そういう日程とかスケジュールについては、両親、いわゆる保護者に対する相談はあるのですか、ないのですか。

○松本（弥）委員

ある団体もあると思います。

○安田委員長

ある団体もある、でも一方的なところもある。

○松本（弥）委員

大会は、もう年間通してスケジュールとして組み込まれているところもあると思います

ので、その辺は……。

○安田委員長

それは、いわゆる学校からではなくて、サークルとか、そういうものの中から。

○松本（弥）委員

そうです、はい。

○安田委員長

忙しいというのが僕、理解できていないのですが、行事が忙しいということ。

○松本（弥）委員

行事とか大会でずっと週末のたびに、土曜日はあっちの大会に出て、日曜日はこっちの大会に出て、それに伴って毎週平日は練習してみたいなことがあるので、それは多分小学校だけではなくて中学校もだと思いますが。

○尾室教育委員会事務局長

今、松本委員が言われたように、小学生が忙しいという実態は教育委員会としてもよく聞いています。今言われた中で、放課後といいますか、スポーツ少年団、これについてはいろんな活動があると思いますが、教育委員会といたしましては、少年団を指導される方々に対しまして、先ほども言われましたけれども、講習会とか、それから指導者のマニュアルをつくりまして、例えば過度な練習はしないとか、週に何日間かは練習しない日をつくりましょうとかという指導といいますか、考え方はお伝えしております。ただ、言われたように、実態として、年間の大会にどこからどこまで出るのか出ないのかというのは、我々はどうのこうのと言うわけにいきませんので、その辺はそれぞれのスポーツ少年団なり、また、かかわっておられる保護者の方の中で決められたことだと思います。できる限りそういったことで小学生が、今言われているのは、地域の活動ができないということがないように、我々としても気を使っていきたいと思っております。以上です。

○山根委員

私は、交流人口の拡大というところでお話しさせていただきたいと思います。

先日、ジオパーク内でカヌー体験というのをやってきました。それに参加したのが、鳥取は２人で、あとみんな県外の人たちばっかりでした。これほどすばらしい自然があるにもかかわらず、鳥取の人は皆よそに出かけていく、お父さん、お母さんと車に乗って県外に出かけていって、鳥取の人は鳥取で遊ばないという、そこが１つ。何かものすごく、すばらしい自然があるのに何で鳥取で遊ばないのかなということが１つと、それから安蔵の

森林公園にも行ってきたのですが、ここでコテージを予約していらっしゃる方が鳥取ではいなくて、ほとんど全部県外の人が予約でいっぱい、夏休み中、県外でいっぱいという状況です。安いのですよね、よそに行くよりも随分安くて家族で楽しめるのに、どうしてなのかなと、この辺がすごく疑問に感じているところです。

○安田委員長

ありがとうございます。いつでも行けるがという感覚ではないのですかね。

○山根委員

そうですかね。

○安田委員長

大体地元ではそうですよね。私の話で申しわけないのですが、高等学校の同窓会の連中らと鳥取で同窓会をしたのです。明くる日、行くところもなくて、山陰海岸、そこに行ったら、わざわざ３Ｄで映像を見せてくれるのです。時間外にもかかわず、よく来られましたみたいな感じで。それを見せていただいたら、ものすごいですよね、うわっ、こんなにいいところがあるのだというのは気がついていない、地元の人間はやっぱり気がついてないですね。こういうのはやっぱりもっともっと、ジオパーク推進委員会とか、そのあたりのＰＲも当然必要でしょうし、鳥取市としても、観光行政を踏まえて、もっと地元に金を落としてと、県外の方ばかりではなくてというところはいかがでしょうか。

○大田経済観光部長

先ほど言われた、確かに私もそれを感じるところがあります。地元の方は余り、砂の美術館でもまだ、皆さん来ておられるかといったらそうでもないところがありますし、ただ、ジオパークなんかを生かしまして市内でイベントをしたり広報したりとか、できるだけＰＲしていきたいということで今後も努めていきたいと思いますし、今一つ観光関係でも、着地型の観光というか、こちらから観光商品をつくるという中で、いろいろ自転車だとか歩くとか、こういうことも力を入れていって、市民観光という視点でまちの中を歩いていただいたり、歴史もそうですけれども、そういう取り組みをこれからちょっと強化していきたいなと思っています。御意見をありがとうございます。

○安田委員長

一応テーマ３つに関しては個別に話をしていただいたのですが、ここだけはどうしてもという御意見があれば。

○谷上委員

分野的には全体になるのですが、佐治町は、今、農家民泊とか、グリーンツーリズムの推進を行っておりまして、まちづくりにもなるし、仕事づくりにもなるし、人づくりにもなるのかなと思っていまして、現在、県のほうも教育旅行誘致協議会といって、修学旅行などを受け入れるような体制もできておりまして、鳥取市のほうも民泊とか体験メニューを整備して、県外の大きな学校とか、そういった教育旅行の受け入れの整備をしていったらどうかと思います。全国で、先週も事例などを勉強しに行ったのですが、３年ぐらいで何千人と来るような整備をされたり、もう整備をするだけでかなり教育旅行として成り立つようなきっかけがありますので、中国地方でも鳥取の佐治のほうは割と教育旅行などに取り組んでいますので、そういったのを支援したりとか、そういったのがもう佐治ではおさまらなくて、河原であったり、用瀬であったり、そういったところに力を求めて頑張っていこうかという話をしたりもしていますので、ちょっと話がまとまらなくなったのですが、何でしょうね、済みません。

○安田委員長

要は広域的な連携をしながらということでしょうね。そのあたり、小谷委員、一言あれば。

○小谷委員

行政ではないのですが、教育旅行というのは、今おっしゃったとおり、県のほうでも力を入れていこうとしています。ただ、教育旅行というのは、大体３年先ぐらいのターゲットなので、これから整備をしていってゲットしていこうかなと。今、やはり中山間地域、鳥取市の佐治とか用瀬に限らず、智頭とか八頭とか、そこのあたりが切実な問題ですので、民泊の推進というのは教育旅行の中ではターゲッティングをしております。ただ、いろんなやはり民泊、民家に泊まる、体験するので、もちろん受け入れる側のいろんな意識啓発が必要なので、両方、車の両輪で、ちょうど６月だったかな、協議会ができてスタートを始めたところです。

○安田委員長

ありがとうございます。智頭町が、森のようちえんですか、結構、町長みずからがＰＲなさって、形半分かもわかりませんが、全国発信をなさっている。やっぱり鳥取市も自信を持ってそういう発信を、やっていないとは申し上げませんが、どんどんやっていただきたいなという気がします。何せ地味です。知事は結構県外に出られていますが、市長ももう市庁舎にいらっしゃらずに、どんどん出ていただいて鳥取市のＰＲに努めていただいて、

仕事は副市長が全部やっていくという形のほうが理想的ではないかなと思っておりますが、どうでしょうか、副市長。

○羽場副市長

そのとおりだと思います。やっぱり外向きのアピールということも必要だと思いますし、大事だと思いますし、せっかくマイクをいただいたので、総括するつもりは全然ないですが、今のさまざまな御意見をいただいていて、ありがとうございます。

特に白岡委員が言われた、また、小谷委員も安田委員長も言われました、個人向けというか、移住者向けというか、そういった支援が必要だという、個人だと支援できないというのは限界だと小谷委員も言われましたが、まさしくそのあたりというのは、役所の仕事ですから、なかなか本当の個人、全く個人の支援というのはやっぱり効果の検証も必要という、役所仕事なものですからそういった部分はありますが、貴重な御意見だったなと思って、本当に目からうろこ状態がありましたので、この辺については、さすが総合企画委員会のメンバーさんだなと思いましたので、心強く皆さんの御意見を聞かせていただいておりました。総括するものでも何でもないですが、ありがとうございます。

○小野澤委員

砂の美術館も、私も毎年、年間フリーパスを買わせていただいているのですが、まだ行かせていただいてなくて、やはりいつでも行けるだろうというのは確かにあると思いますが、宣伝になりますが、３Ｄプロジェクションマッピング、これはすごいですから、皆さん、行っていただければと思います。

最後のまちづくりのところで、目標値、重要業績評価指数、ＫＰＩについてですけれども、基準値というのが現状、直近の年度でつくってらっしゃるのでしょうけれども、移住定住者、平成２６年は３５１人基準値で来てらっしゃって、例えば目標値、１年で２００人以上という低い目標に見えますし、では、具体的に砂の美術館を４６万人を５０万人にするのだったら、たった４万人、１割ですが、どうやってふやすのかという具体的なものが何か見えてきていませんし、その次の山陰ジオパークを生かした取り組みの推進、ジオパークセンターへの入り込み客数９万８，０００人を１０万人にする、わずか１万人ふやそうというＫＰＩ、今もやっていらっしゃって、これだけのものをほぼ横ばいでは何か気合いが足りないのかなと。民間企業でいえば、こんな予算では全体通らないというところがありますので、もっと本格的に具体的に考えていただいて、ＫＰＩももっと、すごいな、やる気があるなというのが何か見えたらいいのかなという気がします。

○安田委員長

おっしゃるとおり、非常におとなしいというか、私たちの目標値というのは、少なくとも、プライベート基準ですと、２５％以上、３割、これが当たり前ですので、そこらあたりも念頭に置いていただいて、少し指数がどうなのかなという話ですけれども。

○大田経済観光部長

私のところが指摘されましたので。この数字については、まだこれから、今吟味しているところでして、砂の美術館４６万が５０万、一番多いときは５５万あった時期があるのですが、若干ここは観光客が少なくなって落ち気味ということがあるので、とにかく５０万人は目標にしていきたいというところはあります。ジオパークセンター、ここら辺は再度検討したいなと思っております。もちろんこのＫＰＩについては、これに載っているのですが、雇用も５，０００人とありますが、これも正規雇用にしていこうかなとか、数字上、いろいろ検討していきたいと。言われる御指摘、できるだけ前向きに、といっても達成ができないことにしても困りますし、ちょっと考えさせていただきたいと思います。

○安田委員長

考えるのは結構ですが、実行しましょう。よろしくお願いいたします。

それでは、報告事項に移らせていただきたいと思います。

中核市への移行についてということで、事務局よりよろしくお願いします。

（２）報告事項　中核市への移行について

○事務局説明（保木本中核市推進監参事）

資料３に基づき説明（略）

○安田委員長

ありがとうございました。

１０　その他

○安田委員長

それでは、その他に入ります。事務局、何かございませんか。

○事務局（塩谷創生戦略室長）

日程の相談なのですが、次回、第３回の鳥取市総合企画委員会ですが、９月議会の前に開催したいと考えておりまして、皆さんの御都合をお聞かせ願えたらということです。

次回、リニューアルした案のほうを皆様のほうに送らせていただきまして、また見ていただくという形で進めて……（「また調整という形で」と呼ぶ者あり）日程はまた調整させていただきたいと思います。

○安田委員長

はい、わかりました。８月２８日で調整という形にしておいてください。また後日連絡させていただきたいと思います。

１１　閉　　会

○安田委員長

それでは、これをもちまして、ちょうど定刻、ジャスト・イン・タイムですね、第２回の鳥取市総合企画委員会を閉会させていただきます。どうもありがとうございました。